

5年 「生活環境を守る人々」にプラスワン

(教科書では『小学社会5下』p.48~58)

現代の子どもたちにとって、環境を守るということは、「当然のこと」「当たり前のこと」になりつつある。自動車も以前に比べて有害なガスはほとんど排出しないし、川べりを歩いても嫌な臭いはしてこない。

しかし、40~50年程前は、空気が汚れている町や、ヘドロのたまった海も珍しくはなかった。現在ある良好な生活環境は、もともとあるものばかりではなく、人々の努力によって回復させたものも少なくない。

子どもたちにそのことを実感させるような授業展開を工夫したい。

1 「つかむ」段階の教材に、子どもの詩をプラスワンして、問題意識を高める

導入では、北九州市の副読本に掲載されたり、環境ミュージアムに展示されていたりする「公害」という詩を使った。この詩は、当時の小学生が書いたものだ。子どもの詩なので、共感しやすく問題意識を高めることもできそうだと考えた。

公害

北九州市立城山小学校6年 山下竜一

きょうものどがいたい
近くの工場を見ていると
高いえんとつから
真っ黒いけむりがでている
洞海湾からは、くさいにおい
車からは、はいきガスと騒音
こんな生活がいやになる

おじいさんの子供の頃は
城山に住む小鳥のさえずり
洞海湾を泳ぎ回る魚の群
ぎおん祭りのかね、太鼓のひびき
にぎやかだったそうだ

鳥も去り、魚の姿も見えず
一人去り、二人去っていく友人たち
でも去れる者はよい
くらしが立たないでどこへもいけず困って

いる人々もたくさんいるのだ
ぼくの家だって、夜おそくまで父と母が
話しているのを聞いたことがある
「ここにのこるしかないね」
ぼくたちの家族はすすけた屋根に
ひっしにこびりついているセメントの
かたまりと同じだ
いったい、この地球はだれのものだ

けれども、この長い詩をいきなりそのまま提示したのでは、子どもが受け身になってしまい、主体性を引き出せない。そこで、提示方法を工夫した。

① 詩や写真を少しずつ提示して、子どもの主体性を引き出す

「きょうものどがいたい」

まずは、この詩の1行目だけを提示した。

そして、「どうしてのどがいたいのでしょうか」と発問した。

子どもたちは、「大きな声を出し過ぎたから」「かぜを引いたから」「インフルエンザ?」「花粉症かも」と自由に発言していった。

誰でも発言できる発問から入ることで、子どもの興味・関心を少し高めることができる。謎解きの要素が入ることで、このあとに提示する詩の続きを能動的に読もうとする。

続いて第1連を黒板に掲示する。その際、一部の言葉を穴あきにして提示し、空欄部分に入る言葉を推測させるといい。

きょうものどがいたい
近くの工場を見ていると
高いえんとつから
真っ黒い（ ）がでている
洞海湾からは、くさい（ ）
車からは、（ ）と（ ）
こんな生活がいやになる

四つの空欄部分に入るのは、「けむり」「におい」「はいきガス」「騒音」。正解を知らせると、環境の悪さが際立って見えてくる。注目させたいものは隠して提示するというのは、資料提示の鉄則だ。

子どもたちを十分に引き付けたところで、詩の全文を配る。子どもたちは能動的に読むはずだ。

詩の内容を読み取りながら、当時の北九州の写真を見せていった。林立する煙突から吐き出される黒や赤の煙は、見るからに体に悪そうだ。海が黄色に染まっている写真も、子どもたちは衝撃をもって見入っていた。

② 現在の北九州の様子を知る

「現在の北九州はどうなっていると思う？」と聞くと、「きれいになっている」という予想が返ってきた。以前、福岡県に住んでいた子が北九州に行ったことがあるというので聞いてみると、「普通に青空だった。海も嫌なにおいではなく、普通の海だった。工場はまだあったと思う」と教えてくれた。

子どもからの経験談が聞けなければ、最近の北九州の写真を見せて、環境が改善されていることを知らせればよい。子どもたちは、どうやって環境を改善したのかが気になってくる。

③ 疑問に思ったことを発表し、学習問題を作る

「ここまでで疑問に思ったことはありますか」と子どもたちに考えさせると、次のことが出された。

- ・なぜ工場は体に悪いものを出していたのか
- ・工場からはどんな物質が出されていたのか
- ・今は鳥や魚はいるのか
- ・どうやって海や空をきれいにしたのか

これらの疑問をもとに学習問題を作った。

「北九州では」と書き出しを示し、その続きを子どもたちから出させながら、このようにまとめた。

学習問題 北九州では、どのように公害が発生し、どのように公害がなくなっていたのだろう。

教材は、提示方法や発問を工夫することで、その価値をさらに高めることができる。逆に提示方法を間違えると、教材の価値は半減してしまう。

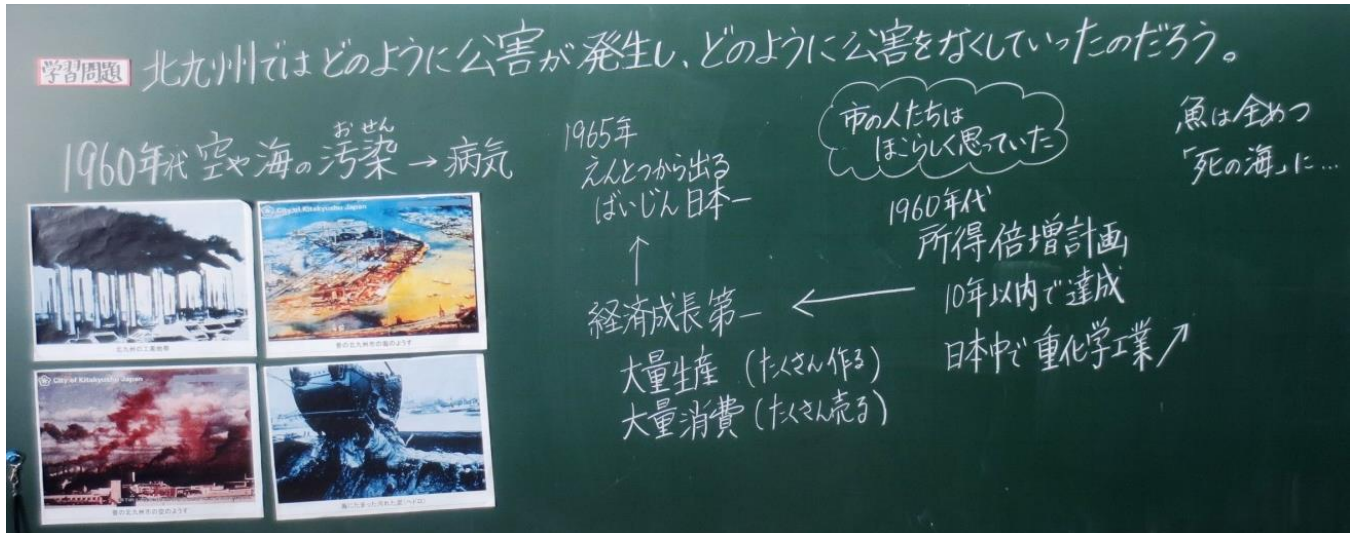
2 板書の工夫をプラスワンして、調べ活動を活性化させる

北九州の公害について、次の三つのことを1時間ごとに調べていった。

- ①公害の原因 ②解決のために行った対策 ③現在の北九州市の様子

調べ活動のために、教科書・資料集以外に、北九州市のホームページに掲載されている小学校高学年用の環境教育副読本『みんなで守ろう!!きれいな地球』(PDF形式)の一部を使った。

【第2時】



第2時は、「公害の原因」を調べた。公害の直接の原因である汚染物質のことだけを学習すると排出源の工場だけが悪いと子どもは思ってしまう。高度経済成長期の時代背景にも触れると、北九州市だけでなく日本全体の問題だったことが理解できる。

【第3時】

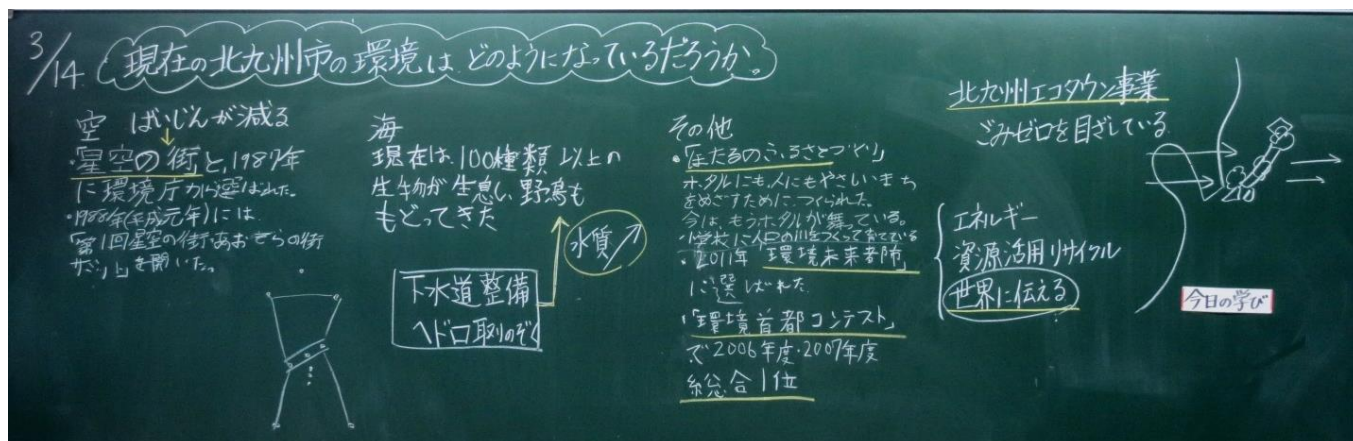


第3時には、「解決のための対策」を調べた。授業の初めに、簡単に予想を立てた後、調べ学習に入った。黒板に、「住民」「市役所」「工場」「国」の四つの立場を書いておき、それぞれについて分かったことを、調べ終わった子どもに書かせていった。

早く調べ終わった子どもが、自分で板書するこの手法は、今風に言うなら「アクティブな板書」といったところだろうか。黒板に書きたいという気持ちをもつ子は結構いるので、この方法は、調べる意欲を高めるとともに、発表の時間を短縮することにもつながる。

教師のように短くまとめて書くことができない子もいるので、黒板に書いてあることが分かりにくい場合もあるが、経験を重ねることで要領が分かっていく。

【第4時】



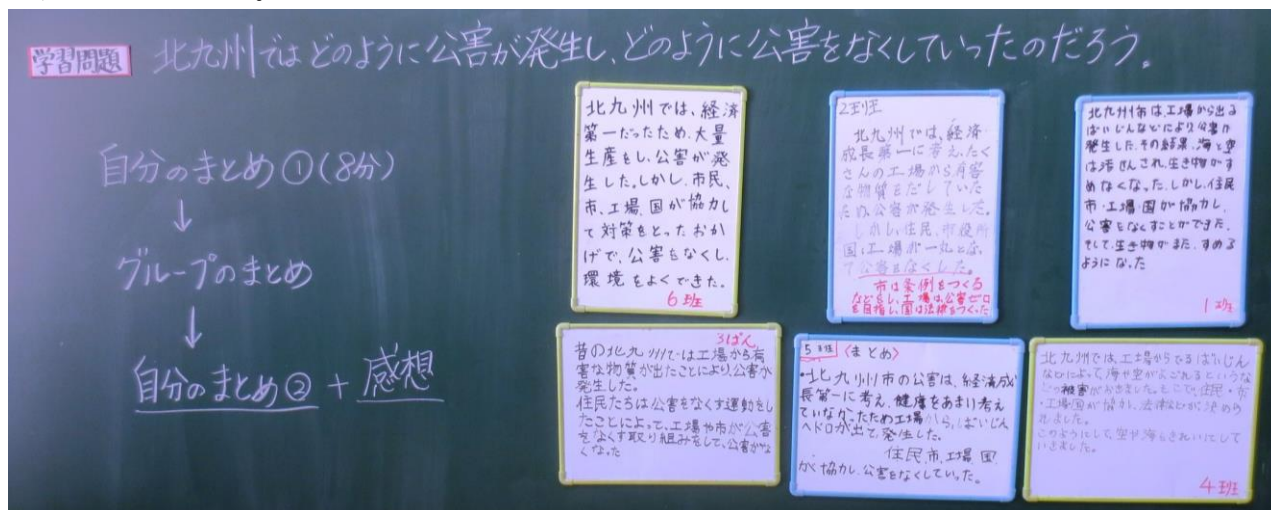
第4時は「現在の北九州市の様子」を調べた。「空」「海」「その他」の三つの視点で調べるよう指示し、前時のように調べ終わった子どもに黒板に書かせていった。

3 まとめる活動にグループによる話し合い活動をプラスワンして、表現力を高める

調べてきた内容をまとめる活動は、「グループによるアクティブな話し合い活動」を取り入れるとよい。次のように3段階で行った。

- ①まずは、自力でノートにまとめる。(まとめ①)
- ②各自のまとめをグループ内で発表し合い、グループのまとめをホワイトボードに書く。
- ③各グループのまとめを黒板に掲示して、自分のまとめを再度ノートに書く。(まとめ②)

この方法だと、モデルになる文章が、ホワイトボードに書かれているので、全員が自分のまとめを書くことができる。まとめ①とまとめ②の両方をノートに書かせることで、子どもの思考の変容を見取することもできる。



(2017年1月)

あし げんしゅう
風 元秀

東京都の公立小学校教師。教師歴28年。

楽しみながら、調べ・考え・表現する力が高まっていく
社会科授業を旨として研究・実践をしている。